

令和3年度 多胡碑周辺遺跡発掘調査速報展

会場：多胡碑記念館／期間：令和4年2月5日(土)～2月20日(日)

事業の概要

高崎市教育委員会では、特別史跡多胡碑周辺において、多胡碑に記された古代多胡郡の役所跡に関連する遺跡を確認するための調査を平成23年度より継続して実施しています。

今年度の第11次調査は、多胡郡正倉跡たごくんしょうそうあとに近い、一段低い段丘面で発掘調査を行いました。多胡郡の役所跡と直接関連するものではありませんが、古墳時代前期どうきょうの銅鏡が保存状態良く発見されました。発掘調査で古墳時代前期の銅鏡が出土するのは大変珍しいことです。



発見された古墳時代前期の銅鏡

出土した時のようす

多胡郡正倉跡に関連する奈良・平安時代の遺構を確認するために、手作業で土を掘り下げていたところ、地上から40センチメートル程の深さより、銅鏡どうきょうが鏡面を上にした状態で出土しました。鏡面は破損のない完形で、銅錆の少ない良好な保存状態で出土しました。

周辺を調査したところ、長方形をした長軸約75センチメートル、短軸約54センチメートルの遺構を確認しました。銅鏡はこの遺構の東側の短辺寄りから出土しました。



銅鏡（鏡面を上にして出土）

銅鏡といっしょに納められたもの

銅鏡の直下からは、鉞やりがんなと呼ばれる鉄製工具1点が出土し、鏡の周辺からは管玉くだたま1点とガラス小玉こだま8点が出土しました。

銅鏡が出土した遺構

銅鏡、鉞、ガラス小玉は、古墳時代前期の古墳の副葬品として、よく見られるものです。しかし、銅鏡が出土した長方形の遺構周囲では、古墳に伴う周溝や盛土の痕跡は確認できませんでした。



銅鏡が納められた遺構

銅鏡の種類とつくられた年代



銅鏡裏面



獣像拡大

大きさと種類

出土した銅鏡は、古墳時代前期に日本国内で製作された倭鏡と呼ばれるものです。直径 10.47 センメートル、重さ 126 グラムです。鏡の裏面には鳥頭のように尖った口先をもつ獣像を四つの突起（乳）の間に配置しています。デザインの特徴から「鳥頭四獣鏡系（ちょうとうしじゅうきょうけい）」に属する銅鏡と考えられます。鏡の裏面には、重ねて納められた鉋の錆が付着しています。

つくられた年代

「鳥頭四獣鏡系」の製作年代は、古墳時代前期中頃～中期初頭で、本資料はデザインの特徴から古墳時代前期後半頃と考えられます。現在のところ本資料と同じ鑄型で作られた銅鏡は確認できていません。県内で鳥頭四獣鏡系に属する銅鏡が発掘調査で出土したのは初めてのことです。

鉄製工具 鉋（やりがんな）

鉋は、木材の表面を細かくけずり取り平らに加工する工具です。残存する長さは 18.5 センチメートルで、刃部の先端が数ミリメートル欠けています。本来の長さは 19 センチメートルくらいです。

出土状況から、遺構底面に刃部の裏面（削り出したへこみのある面）を向け、刃部の表面が銅鏡と重なるように埋納したと考えられます。

形状は、茎部から刃部まで同じ幅で連続する古墳時代前期の古いタイプです。茎部には木質が錆化して残り、工具に装着した木柄の痕跡と考えられます。



銅鏡取り上げ後の状況

くだたま 管玉・ガラス小玉

玉類はガラス製の小玉 8 点、硬質な石で作られた管玉 1 点が出土しました。ガラス小玉 4 点は銅鏡に近い位置から、その他は遺構の中央付近から出土しました。

